

ある総合病院の依頼を受けて、小児病棟を訪れた時のことです。
そこには余命少なくも、かけがえのない人生の光を眩いばかりに放つ、尊い子どもたちがおりました。
同時に高徳な犠牲的精神により献身的に子どもらに携わる、医師や看護師がいらっしやいました。
ほんの数時間の滞在で、その場に可能な幾つかの芸術プログラムを示唆させていただきただけでしたが、以降の人生に極めて貴重で思い出深いひとときとなりました。
その日以来、小児難病の子どもらの存在は片時も頭を離れず、ライフワークの最後のひとつとして、その子らに何ができるのかを考え続けてまいりました。
誕生以来、毎日が人生の最終章である彼ら、近い将来に死の扉をくぐる彼らにとって相応しい芸術行為は何か？
ひとりの子どもを正確に観察・診断し、その子に相応しい療育・芸術教育・セラピーを与える為には、複数の分野からの目が注がれ、智恵が寄せられていなければなりません。終末期の子どもら、人は尚更です。
家族、医師、看護師のご献身に、私ども芸術治療教育者の経験と審美眼がお役に立てることを願います。

2016年9月4日

一般財団法人《花の家》代表理事
演出家・劇作家・芸術治療教育者
川手鷹彦